

御厩町工場建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

正勝遺跡

2025年6月

富士船舶装備株式会社
高松市教育委員会

例 言

- 1 本報告書は、御厩町工場建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、高松市御厩町に所在する正勝遺跡の報告を収録した。
- 2 調査地、期間及び面積は、次のとおりである。
調 査 地：高松市御厩町字正勝 1420 番 1
調査期間：令和 6 年 5 月 7 日～6 月 28 日
調査面積：約 718 m²
- 3 本調査を実施するに当たり、高松市・高松市教育委員会・富士船舶装備株式会社は「御厩町工場建築工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する協定書を締結した。
- 4 発掘調査及び整理事業は、高松市教育委員会が実施した。調査及び整理に係る費用は、富士船舶装備株式会社が全額負担した。
- 5 発掘調査及び整理事業は、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員 梶原慎司・宮田匡、同課会計年度任用職員 上原ふみが担当した。
- 6 本報告書の執筆及び編集は宮田が担当し、梶原・上原の補助を得た。
- 7 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会が保管している。
- 8 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中方位は座標北を指す。なお、これらの数値は世界測地系第IV系にしたがった。
- 9 遺構・遺物の縮尺については図面ごとに示している。
- 10 土層及び土器観察表の色調表現は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。
- 11 整理事業の遺物写真撮影は西大寺フォトに委託した。
- 12 遺物の時期は以下の文献に拠った。
片桐孝浩 1992「考察—古代から中世にかけての土器様相—」『川津元結木遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
佐藤亜聖 2022「畿内産瓦器概」日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

- 佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念 考古学論叢』関西大学
- 佐藤竜馬 1995「楠井産土器の編年」『国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
- 佐藤竜馬 2000「西村型土器碗」の系譜」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅷ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 山本信夫 2000『大宰府条坊跡XⅤ—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

- 第1節 調査の経緯・・・・・・・・・・ 1
- 第2節 調査の経過・・・・・・・・・・ 1
- 第3節 正勝遺跡の普及啓発について・・ 2

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

- 第1節 地理的環境・・・・・・・・・・ 3
- 第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・ 3

第Ⅲ章 調査の成果

- 第1節 調査方法・・・・・・・・・・ 8
- 第2節 基本層序・・・・・・・・・・ 8
- 第3節 遺構・遺物・・・・・・・・・・ 8

第Ⅳ章 まとめ・・・・・・・・・・ 31

挿 図 表 目 次

- 第1図 調査位置図・・・・・・・・・・ 1
- 第2図 高松平野と遺跡の位置・・・・・・・・ 3
- 第3図 周辺の主要遺跡分布図・・・・・・・・ 6
- 第4図 遺構分布図・・・・・・・・・・ 9
- 第5図 東工区壁面・・・・・・・・・・ 10
- 第6図 西工区壁面・・・・・・・・・・ 11
- 第7図 SD01 平・断面図・・・・・・・・ 12
- 第8図 SD01 出土遺物・・・・・・・・・・ 13
- 第9図 SD02 平・断面図・出土遺物・・ 15
- 第10図 SD03 平・断面図・・・・・・・・ 17
- 第11図 SD03 上層出土遺物・・・・・・・・ 18
- 第12図 SD03 中層出土遺物①・・・・・・ 19
- 第13図 SD03 中層出土遺物②・・・・・・ 20
- 第14図 SD03 中層出土遺物③・・・・・・ 21
- 第15図 SD03 中層出土遺物④・・・・・・ 22

- 第16図 SD03 中層出土遺物⑤・・・・・・ 23
- 第17図 SD03 最下層・試掘出土遺物・・ 24
- 第18図 SD04 平・断面図・・・・・・・・ 25
- 第19図 SD05 平・断面図・・・・・・・・ 26
- 第20図 SD06 平・断面図・・・・・・・・ 27
- 第21図 SD08 平・断面図・・・・・・・・ 27
- 第22図 SD07 平・断面図・・・・・・・・ 28
- 第23図 SK01～04 平・断面図・・・・ 30
- 第1表 遺跡一覧・・・・・・・・・・ 7
- 第2表 土器観察表①・・・・・・・・・・ 32
- 第3表 土器観察表②・・・・・・・・・・ 33
- 第4表 石器観察表・・・・・・・・・・ 33
- 写真 1-1 現場見学の様子①・・・・・・ 2
- 写真 1-2 現場見学の様子②・・・・・・ 2

写真図版目次

図版 1	SD03 出土供膳具		SD07 完掘状況
図版 2	東工区完掘状況（南から） 西工区完掘状況（西から）	図版 7	SD08 断面 SD08 完掘状況 SK01 完掘状況 SK01 断面（南側から） SK01 断面（西側から） SK02～04 完掘状況
図版 3	SD01 断面 SD01 完掘状況		
図版 4	SD02 断面 SD02 完掘状況	図版 8	SD03 出土須恵器 SD03 出土土師質土器鍋・甕 SD03 出土移動式竈
図版 5	SD03 断面 SD03 遺物出土状況	図版 9	SD03 出土瓦器碗・黒色土器碗 SD03 出土土師質土器（供膳具） SD03 出土土師質土器鍋・石器 SD02 出土遺物 SD03 出土須恵器・白磁碗 SD01 出土遺物
図版 6	SD04 断面 SD04 完掘状況 SD05 断面 SD05 完掘状況 SD06 断面 SD06 完掘状況 SD07 断面		

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

当該地での工場建築工事に際し、土地所有者から高松市教育委員会（以下、市教委）に対し埋蔵文化財包蔵地の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「御厩4号塚」に近接することから、令和5年12月25日付けで埋蔵文化財の試掘調査依頼が提出された。令和6年1月22日に試掘調査を実施した結果、当該地で遺構・遺物を確認したことから、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「正勝遺跡」として新規登録された。試掘結果に関しては、「高松市教育委員会編 2025」を参照されたい。



第1図 調査位置図 (S=1/2,500)

その後、事業者である富士船舶装備株式会社から令和6年4月5日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出が提出され、市教委から香川県教育委員会へ進達したところ、4月12日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう行政指導があった。これを受けて市教委は事業者と協議を行い、発掘調査を実施し記録保存を行うことで合意し、4月26日付けで埋蔵文化財調査協定書を締結した。これに基づき市教委は発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

発掘調査は令和6年5月7日から開始し、6月28日に終了した。調査地が狭小だったため、廃土の置場などを考慮し東工区と西工区に分割して調査を行った。調査の主な工程は以下のとおりである。

5月7日～10日	道具の搬入、東工区の重機掘削、遺構検出
5月13日～6月12日	遺構掘削（主にSD01・03の掘削）、図化作業、写真撮影
6月13～17日	東工区の埋め戻し、西工区の重機掘削、遺構検出
6月18～22日	遺構掘削、図化作業、写真撮影
7月4～5日	西工区の埋め戻し

整理作業は令和6年7月1日から開始し、令和7年6月30日に本書の刊行をもって終了した。

第3節 正勝遺跡の普及啓発について

事業者である富士船舶装備株式会社から発掘現場の見学をしたいとの申し出があり、令和6年5月22日に実施した。折しも、遺構から比較的残りのよい遺物が出土しており、現場の説明に加えて簡易的な発掘の体験を行った。

《参考文献》

高松市教育委員会編 2025 『高松市内遺跡発掘調査概報—令和6年度国庫補助事業—』 高松市埋蔵文化財調査報告第256集、高松市教育委員会



写真 1-1 現場見学の様子①



写真 1-2 現場見学の様子②

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は行政区分としては香川県の県庁所在地であり、香川県の中央よりやや東に位置する。北は瀬戸内海に面し、南は阿讃山脈がそびえる。市城の大部分には高松平野が広がっている。高松平野は香東川による扇状地を主体としながら、本津川・春日川・新川等の影響を受け形成されている。平野には小規模な山地が点在する。

正勝遺跡の所在する高松市御蔵町は、高松平野の西部に位置する。香東川と本津川に挟まれた微高地上に位置し、正勝遺跡の約300 m北側に本津川が流れている。さらに北側には袋山や勝賀山がそびえ、西側には五色台の山々が連なる。



第2図 高松平野と遺跡の位置

正勝遺跡の所在する高松平野西部を中心に歴史的環境を概観する。

【旧石器時代】

正勝遺跡の所在する高松平野西部は旧石器時代の遺跡が集中する場所である。詳細については〔森下2001〕にまとめられているが、遺跡名のみをあげると、中間西井坪遺跡・香西南西打遺跡・西打遺跡等がある。また、中間東井坪遺跡では旧石器から縄文時代の石器が出土している（〔財〕香川県埋蔵文化財調査センター編 2004）。

【縄文時代】

高松平野西部では縄文時代の遺構は数少ない。西打遺跡では前期末の遺構・遺物が確認されており、その隣接地の香西南西打遺跡では縄文時代以降とみられる有舌尖頭器が出土している。

【弥生時代】

鬼無藤井遺跡において前期中頃の環濠と想定される溝が見つかっている。溝は二重に巡っており、内環濠に囲まれた範囲には、居住域が確認されている（高松市教育委員会編 2001）。佐料遺跡では後期後葉の遺物が多量に確認されており、後期後葉の短期間に形成・廃絶した集落と想定されている（高松市教育委員会編 2014）。

【古墳時代】

古墳時代には、鶴尾神社4号墳を端緒として、石清尾山山塊に石清尾山古墳群が展開する。前期には積石塚古墳を主として尾根上に築造されている。中期には築造が行われなくなるが、後期には石清尾山2号墳などの群集墳が再度石清尾山山頂付近に築造される。

高松平野西部に目を転ずると、勝賀山山麓において前期にかしが谷古墳群、中期初頭に今岡古墳の築造がみられる。今岡古墳から出土した土製棺及び埴輪類の一部は中間西井坪遺跡から供給された製品であることが明らかとなっている。中期中～後葉には御殿天神社古墳が築かれた。また、中期後半～後期前半に位置づけられている古墳として相作馬塚古墳、相作牛塚古墳がある。相作馬塚古墳からは甲冑や鍔などの鉄製品が出土しており、男性の被葬者が想定されている。後期に入ると、勝賀山山麓に古宮古墳、鬼無大塚古墳、平木古墳群などが築かれた。

【古代】

古代における高松平野西部の動向として言及すべきは、讃岐国分寺跡・讃岐国分尼寺跡の造営であろう。両寺跡の調査研究については、[高松市教育委員会編 2017a] や [高松市教育委員会編 2018b] に詳述されているため、ここでは遺構についてのみ軽く触れる程度に留めておく。

讃岐国分寺跡では現境内地に金堂及び塔の礎石が露出し、また現在の本堂（鎌倉時代後期建立）が古代の講堂の礎石上に、仁王門（江戸時代前期）が中門跡の礎石上に建っており、さらに本堂の北側では発掘調査により僧房の礎石・地覆石が出土している。讃岐国分尼寺跡では講堂跡及び尼房跡の礎石が確認されている。金堂の礎石は法華寺境内に残されている。これらの礎石は一部抜き取りや位置の移動などがされている。

讃岐国分寺跡・讃岐国分尼寺跡に付随するものとして府中・山内瓦窯跡が存在する。讃岐国分寺跡から南西におよそ1キロに位置する窯跡群である。讃岐国分寺・尼寺に瓦を供給した生産地であり、8～10世紀に操業していたと考えられている。

同時代の集落遺跡としては、正箱遺跡・兀塚遺跡・中間西井坪遺跡などがある。兀塚遺跡では7～8世紀前半の集落が確認されている。正箱遺跡では8世紀中葉～9世紀の掘立柱建物を中心とする集落が、中間西井坪遺跡では6世紀末～7世紀中葉、8世紀後半の集落がそれぞれ確認されている。これらの8世紀後半以降の建物遺構は、条里型地割に沿うように配置されたことが明らかとなっている（信里 2004）。

【中世】

高松平野西部は香西氏の根拠地であった。鬼無には香西氏の平地の居館として佐料城が築かれ、詰城として勝賀山山頂部に勝賀城が築かれた。勝賀城はその後、羽柴秀吉の四国攻めの際に改修され、織豊系の陣城として利用されたと考えられており、その際の土塁などが残されている。香西南西打遺跡では、区画溝に加え「屋敷地」とされる15世紀後半～16世紀中葉の遺構が確認されており、香西氏との関連が想定される。その隣接地である西打遺跡においても「屋敷地」と考えられる遺構が確認されている。時期としては11世紀後半～12世紀前半、13世紀末～14世紀初頭のものであり、条里型地割の影響を受けたことが明らかとなっている（(財)香川県埋蔵文化財調査センター編 2002）。

【近世】

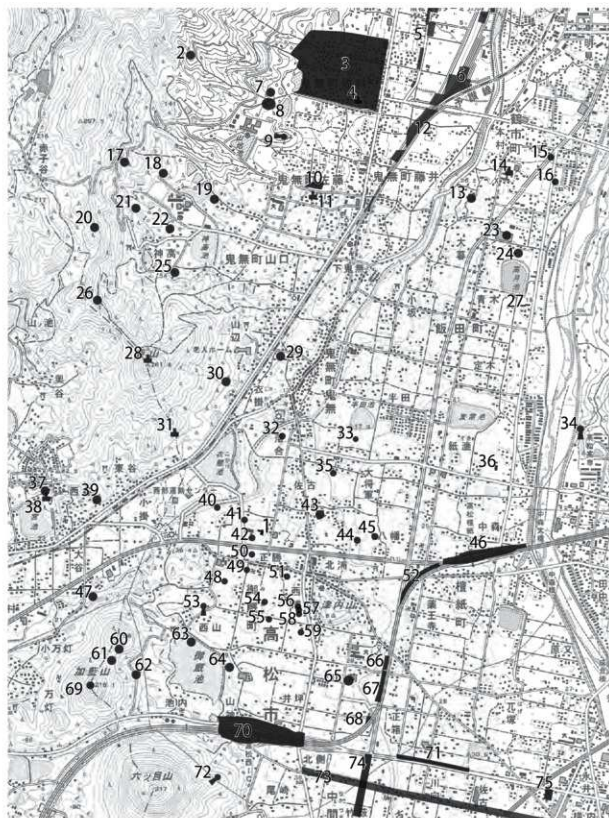
天正15年（1587）に生駒親正が入封し、翌年から高松城が築城された。それに伴い城下町も整備される。その後、寛永17年（1640）の生駒騒動により生駒氏は出羽国矢島（現在の秋田県由利本荘市）に改易となる。寛永19年に水戸藩出身の松平頼重が入部すると、高松城の改修や城下町における上水道の整備などに着手し、高松の発展に寄与した。高松平野西部に関連する事項としては、西嶋八兵衛による香東川の改修があげられる。従来、香東川は石清尾山

の東を主流としつつも山塊の東西に流れていたが、流路の一本化により現在の川筋となっている。

正勝遺跡が所在する御厩町には小規模な塚が点在している。これらの塚は周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されているものの、実態としては不明なものが多い。その中で**御厩南部1号塚**では発掘調査が行われている。塚の中心にあたる層から中世の土師質土器が出土しており、その上層からは近世以降の遺物が確認されている（高松市教育委員会編 2025）。

【参考文献】

- （財）香川県埋蔵文化財調査センター編 2000『西打遺跡Ⅰ』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- （財）香川県埋蔵文化財調査センター編 2002『西打遺跡Ⅱ』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 香川県埋蔵文化財センター編 2014『元塚遺跡』香川県教育委員会
- 高松市教育委員会編 1999『筑城城跡』高松市埋蔵文化財調査報告第43集、高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 2000a『香西南西打遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第46集、高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 2000b『香西南西打遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第50集、高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 2001『鬼無藤井遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第51集、高松市教育委員会
- 高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科編 2009『石ヶ鼻古墳 御厩天神社古墳』高松市埋蔵文化財調査報告第119集、高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科
- 高松市教育委員会編 2014『佐料遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第155集、高松市教育委員会・香川県農業協同組合
- 高松市教育委員会編 2015『御殿貯水池南遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第161集、高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 2017a『史跡国分尼寺跡一第7～14次確認調査』高松市埋蔵文化財調査報告第183集、高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 2017b『相作馬塚古墳Ⅱ』高松市埋蔵文化財調査報告第185集、高松市教育委員会・株式会社日進堂
- 高松市教育委員会編 2018a『御殿貯水池南遺跡Ⅱ』高松市埋蔵文化財調査報告第188集、高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 2018b『特別史跡讃岐国分寺跡Ⅰ 遺構編』高松市埋蔵文化財調査報告第193集、高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 2025『高松市内遺跡調査』高松市埋蔵文化財調査報告第255集、高松市教育委員会
- 信里芳紀 2004「第4章 まとめ」『中間東井坪遺跡 正箱遺跡 八幡遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 森下英治 2001「遺跡の立地と環境」『中間西井坪遺跡Ⅲ』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団



第3図 周辺の主要遺跡分布図 (S=1/25,000)

第1表 遺跡一覧

No.	遺跡名
1	正勝遺跡
2	山の神1号墳
3	佐料遺跡
4	佐料城跡
5	香西南西打遺跡
6	西打遺跡
7	虎池西古墳
8	善師垣古墳群
9	今岡古墳
10	佐藤遺跡
11	佐藤城跡
12	鬼無藤井遺跡
13	王墓古墳
14	筑城城跡
15	あきやま塚
16	中所地神社前塚
17	山口龍神社古墳
18	平木古墳
19	鬼無大塚古墳
20	山口山頂古墳
21	山野塚古墳
22	古宮古墳
23	相作牛塚古墳
24	相作馬塚古墳
25	空家古墳
26	相越古墳
27	飯田町東青木遺跡
28	鬼無城跡
29	鬼塚古墳
30	袋山古墳跡
31	衣掛城跡
32	御殿1号塚
33	半田池南小塚
34	がめ塚古墳
35	御殿5号塚
36	紙渡遺跡
37	向田経塚(椎尾神社経塚)
38	宮尾城跡

No.	遺跡名
39	西大谷古墳
40	御殿3号塚
41	御殿2号塚
42	御殿4号塚
43	御殿大塚
44	大將軍2号塚
45	大將軍1号塚
46	中森遺跡
47	小万灯塚
48	御殿南部10号塚
49	御殿南部2号塚
50	御殿南部1号塚
51	御殿南部3号塚
52	八幡遺跡
53	御殿天神社古墳
54	御殿南部4号塚
55	御殿南部8号塚
56	御殿南部5号塚
57	御殿南部6号塚
58	御殿南部7号塚
59	御殿南部9号塚
60	うたい塚古墳
61	伽藍山東麓古墳
62	山王神社古墳
63	御殿池古墳
64	三つ塚古墳
65	津内・東井坪遺跡
66	葉王寺遺跡
67	正箱遺跡
68	中間東井坪遺跡
69	伽藍山廃寺
70	中間西井坪遺跡
71	兀塚遺跡
72	中間2号墳
73	旧南海道跡
74	川原遺跡
75	道下遺跡

第三章 調査の成果

第1節 調査方法

調査は、建物基礎の一部及び擁壁部分を対象とした。調査地狭小のため畦畔を境に東西に分割し調査を行った。発掘調査は表土から遺構面までを重機により掘削、その後人力により遺構面を精査し遺構掘削を行った。

記録に際しては基準点を基に 1/20 縮尺で平面図及び断面図を作成した。写真撮影はデジタル一眼レフカメラを用いた。

第2節 基本層序

基本層序は大きく2つに分かれる。Ⅰ層は床土で、約 0.3～0.4 m 堆積している（第5・6図1・2層）。Ⅱ層は褐灰色粘質シルト層で、地山である（第5・6図3層）。なお、西工区南西部では褐灰色粘質シルト層はみられず、大小様々な礫を含む明黄褐色極細砂～シルト層が地山となる（第4図）。

遺構検出はⅡ層上面で行った。遺構面の高さは北端が 19.7 m、南端が 19.9 m である。

第3節 遺構・遺物

（1）中世

SD01（第7・8図）

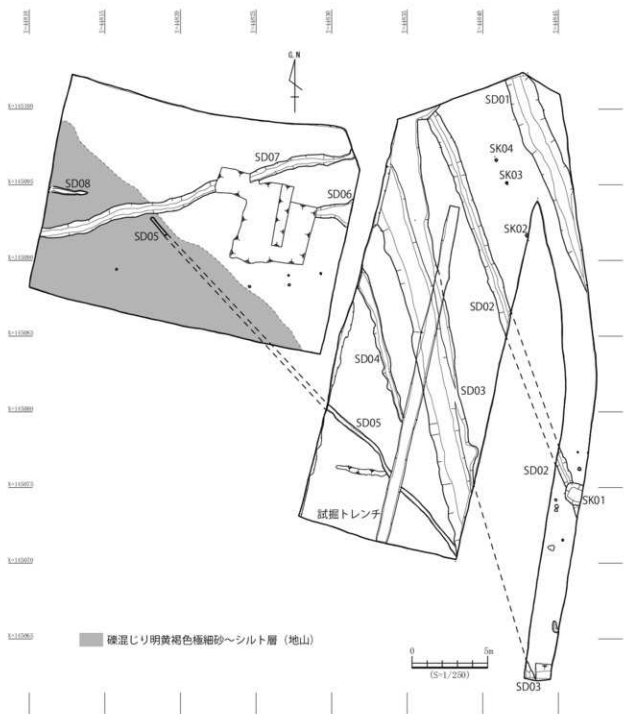
東工区の北東部で検出した北西—南東方向の溝で、幅約 1.8 m、深さ約 0.7 m である。底面の高さは北側が低いため、南から北に向かって流下していたと考えられる。

断面観察を踏まえると、SD01の埋土は大きく3単位に分けることができる。上から上層（第7図1層）・中層（第7図2～7層）・下層（第7図8層）とする。上層の褐灰色シルト層は約 0.12 m 堆積しており、須恵器、黒色土器、土師質土器の小片が含まれている。中層は灰黄褐色（礫混じり）シルト層・黒色礫混じりシルト層・褐灰色シルト層・にぶい黄橙色シルト層・黒褐色シルト層からなり、約 0.4 m 堆積している。土師質土器、瓦器碗、須恵器等が含まれている。下層の黒色礫混じり粘質シルト層は約 0.1 m 堆積しており、土師質土器、黒色土器碗、須恵器等を含む。

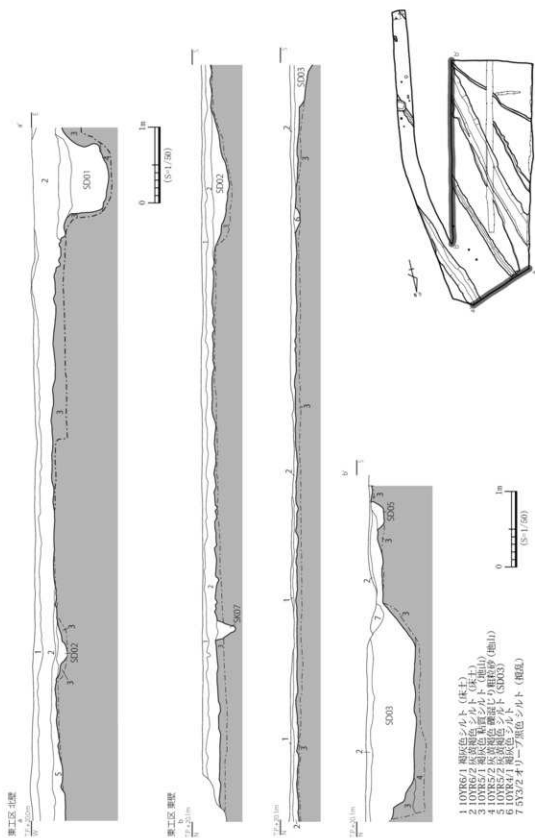
出土遺物

遺物は、土師質土器（1～6）、須恵器（7）、瓦質土器（8・9）が出土している。また、図化していないが、黒色土器碗片も出土している。

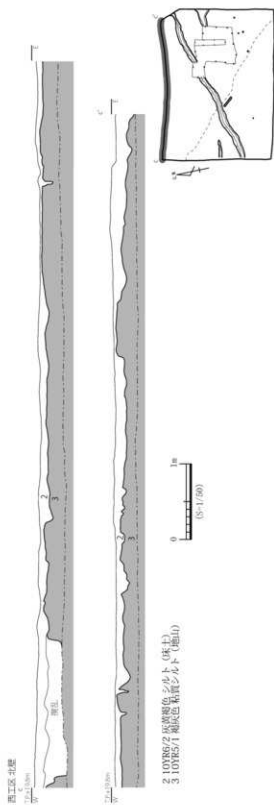
下層からは、1～6が出土した。1は甕の口縁部である。頸部へ向けて肥厚する。2～4は土師質土器鍋の口縁部である。2は端面が明瞭な凹面を形成しているほか、頸部に煤が付着している。3は2ほどではないが端面にやや凹面が形成されている。4は2・3と比較すると口



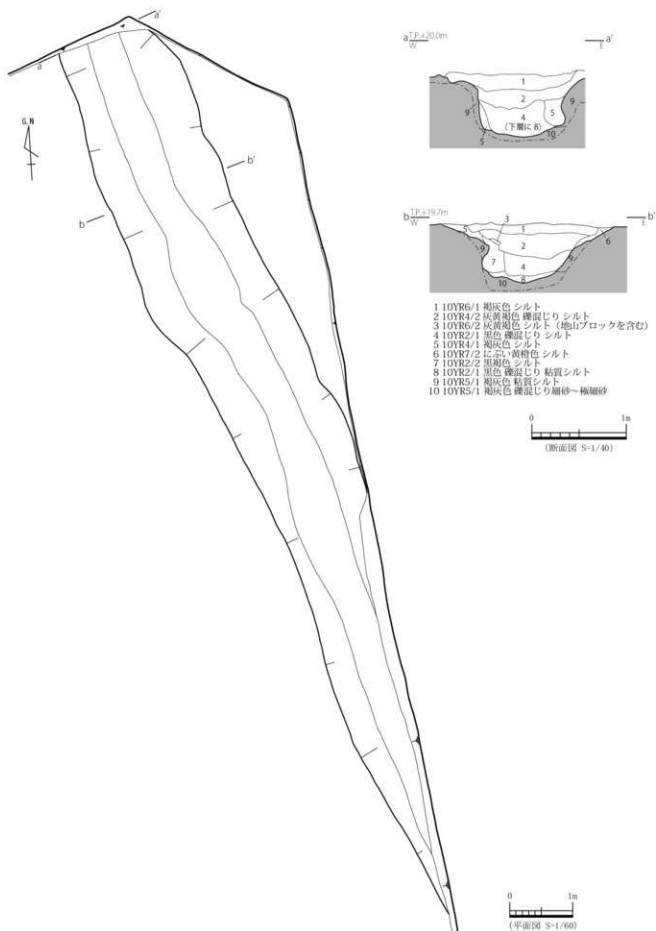
第4図 遺構分布図 (S=1/250)



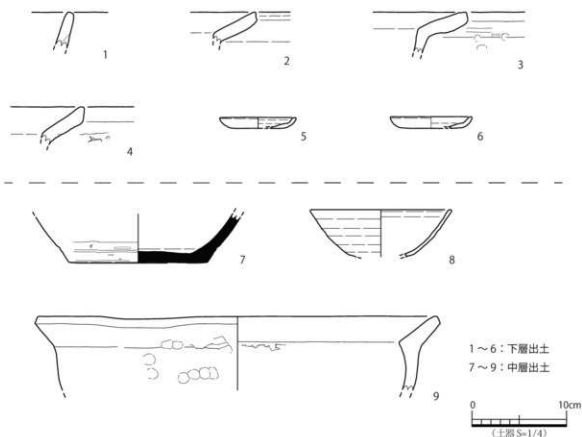
第5図 東工区壁面 (S=1/50)



第6図 西工区壁面 (S=1/50)



第7図 SD01 平・断面図 (平 : S=1/60、断 : S=1/40)



第8図 SD01 出土遺物 (S=1/4)

縁部がやや立ち上がり、端面の調整も凹面ではなく凸面が形成される。1は所属時期は不明だが、2～4はその特徴から佐藤編年のAⅡ-2類（14世紀中葉～後葉）に比定される。5・6は土師質土器の小皿である。ともに全体的に摩滅しており、調整方法は不明である。口径及び形態より佐藤編年のBⅢ-2または3型式（11世紀第4四半期～13世紀第4四半期）に比定される。

中層からは7～9が出土している。7は須恵器の底部。底部調整はナデが施されている。8は瓦器碗である。内外面は摩滅しており調整は不明である。口縁部～胴部の特徴から、12世紀後半～13世紀初頭の和泉型瓦器碗と考えられる。9は土師質土器鍋の口縁部。佐藤編年のAⅡ-2類（14世紀中葉～後葉）に比定される。

上層からは、須恵器片、土師質土器片、黒色土器片などが出土している。すべて小片のため、詳細な時期は不明だが、中世の範囲に収まる。

所属時期

11～12世紀の遺物が出土しているが点数としては多くないことから、それらの遺物は客体的なものと考えられる。これを踏まえ、他の出土遺物の年代から、14世紀中～後葉に埋没したものと考えられる。

SD 02 (第9図)

東工区北東部、SD01より南側で検出した北西—南東方向の溝で、幅約0.8m、深さ約0.24mである。東工区北部中央付近でSD03に、南東部でSK01に切られる。調査区外にのびるため、全容は不明である。断面は半円状で、埋土は黒褐色シルトの単層である(第9図1層)。底面の高さは北側が低いため、南から北に向かって流下していたと考えられる。

出土遺物

10は須恵器杯。貼付高台をもち、内外面ともに回転ナデの調整が施されている。佐藤編年のⅡ-1～3段階(8世紀)に比定される。11は須恵器鉢。讃岐国府跡の29-2Tr SD2031と30-1Tr SD1002で類似する形態のもの(8世紀前葉～9世紀前葉)が出土しており(香川県埋蔵文化財センター編2019)、古代に所属するとみられる。12は土師質土器鉢。器厚はさほど変わらずに立ち上がるが、口縁部付近でわずかに薄くなる。西打遺跡のSD01・02で類似する形態のものが出土しており(財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編2002)、中世前半に所属するとみられる。13は土師質土器鍋の口縁部である。全体をナデ調整で仕上げ、外面の頸部付近に指オサエを施す。端面は凹面を形成する。佐藤編年のAⅡ-2類(14世紀中葉～後葉)に比定される。

所属時期 出土遺物の時期幅があるがSD03に切られていることから、14世紀中葉～後葉までに埋没したものと考えられる。

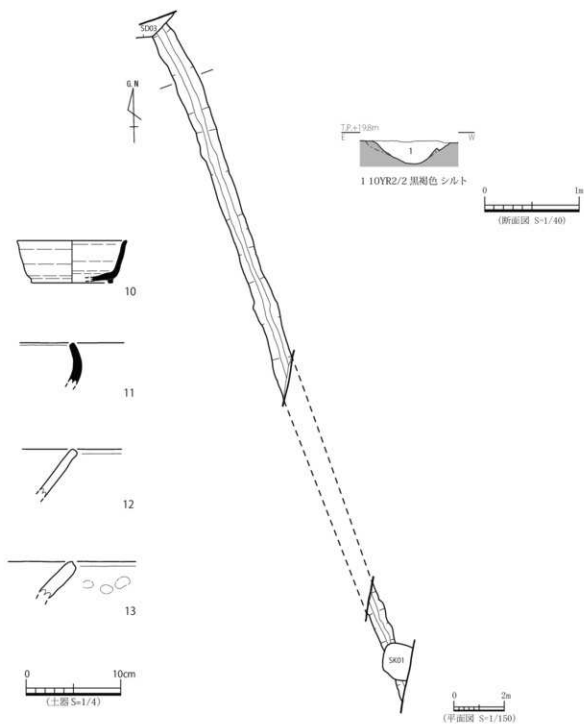
SD 03 (第10～17図)

東工区中央部で検出した北西—南東方向の溝で、幅約2.3～3m、深さ約0.55mである。SD01にはほぼ平行して走る。底面の高さはほとんど変化しないが、SD01と同様に南から北に向かって流下していたと考えられる。調査区外にのびるため、全容は不明である。

埋土は上層・中層・下層の三つに大きく分けることができる。上層の灰黄褐色シルト層(第10図1・A層)は約0.2m堆積しており、土師質土器、瓦器碗、白磁などが含まれる。中層も同じく灰黄褐色シルト層(第10図2・B～F層)が約0.2m堆積しており、須恵器、黒色土器碗などが含まれる。下層の黒褐色粘質シルト層(第10図3～5・G～I層)は約0.2m堆積しており、須恵器などが含まれる。中下層に比べ上層の幅が広く、一部テラス状になっている。後述のとおり、小規模の溝と接続することから、SD03は基幹水路であったと考えられる。

出土遺物

出土遺物の量は本調査の中では最も多い。上層からは14～25が出土した。供膳具(14～22)と調理具(23～25)に分類することができる。14・15は瓦器碗の底部。ともに内面にミガキ調整、外面にナデ調整を施す。14の高台の断面は台形状を呈している。15の高台は外へ踏ん張るような形態である。16は土師質土器碗である。内外面は摩滅しており、調整は不明である。高台は貼付高台である。口径や高台の形などから片桐編年のⅡ-⑤～⑥期(12世紀代)に比定される。17は黒色土器A類の碗。高台を貼り付けた痕跡が明瞭に残る。18は土師質土器杯である。口縁端部のみ残存しており、所属時期は不明である。19・20は白磁碗の底部。19は高台まで施釉されている。20は体部の下半まで施釉され、高台は無釉である。21・22は土師質土器小皿である。21は底部調整をヘラ切りとし、口径及び形より佐藤竜馬による分類のBⅢ-2または3型式(11世紀第4四半期～13世紀第4四半期)に比定される。22は全体



第9図 SD02 平・断面図 (平: S=1/150、断: S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

的に摩滅しており、調整方法及び切り離し方法は不明である。

23・24は土師質土器鍋。23は口縁部が水平方向に強く外反し、端面はほぼ直立する。24は頸部から口縁部にかけて肥厚し、端面では凹面が形成される。23・24は佐藤編年のAⅡ-1・2類(14世紀代)に比定される。25は土師質土器鉢。外面にハケメを施す。佐藤編年のAⅠ類(14世紀前葉)に比定される。

中層からは26～52が出土した。貯蔵具(26～30)、供膳具(31～42)、調理具(43～49)、移動式竈(50・51)、石鏝(52)に分類できる。26～28は須恵器甕。28は体部が一部内面方向へ凹んでおり、その部分に把手の痕跡がみられる。26～28の口縁部の特徴から、十瓶山周辺で生産された製品と考えられ、佐藤編年のC-2型式(11世紀第4四半期～12世紀第2四半期)に比定される。29は須恵器鉢の底部である。外面は板ナデ、内面はヘラミガキの調整である。類似する調整をもつ底部が西村1号窯跡灰原から出土した鉢で認められることから(香川県教育委員会編1980)、11世紀末～12世紀に比定される。30は須恵器壺の口縁部。口縁端部の形態から佐藤編年のC-3型式(12世紀後半)に比定される。

31～33は瓦器碗の口縁部～体部。31は内外面ともにヘラミガキが施される。32は外面をナデ調整、内面をヘラミガキ調整で仕上げる。33は外面をナデ調整及び指オサエ、内面をナデ調整及びヘラミガキ調整で仕上げる。口縁部周辺の炭素吸着がないが、外面の体部に少し炭素吸着が認められる。31～33は口縁部～胴部の特徴から、12世紀後半～13世紀初頭の和泉型瓦器碗と考えられる。34～36は黒色土器A類の碗である。34は完形である。内面をヘラミガキで仕上げており、貼付高台である。35は内面にやや摩滅がみられるがヘラミガキ調整であり、外面は回転ナデ調整であり被熱痕がみられる。36は底部のみであるものの、内面にヘラミガキがみられる。全ての高台の断面が台形を呈し、外方へ踏ん張る形である。34～36は口縁部及び高台の形状から西村型土器碗と考えられ、佐藤編年のAⅡ-4型式(12世紀前半)に比定される。37・38は白磁の碗。37は肉厚の玉縁をもつ。山本編年のⅣ類(11世紀後半～12世紀前半)に比定される。38は削り出しが浅く、底部の器肉が厚い。

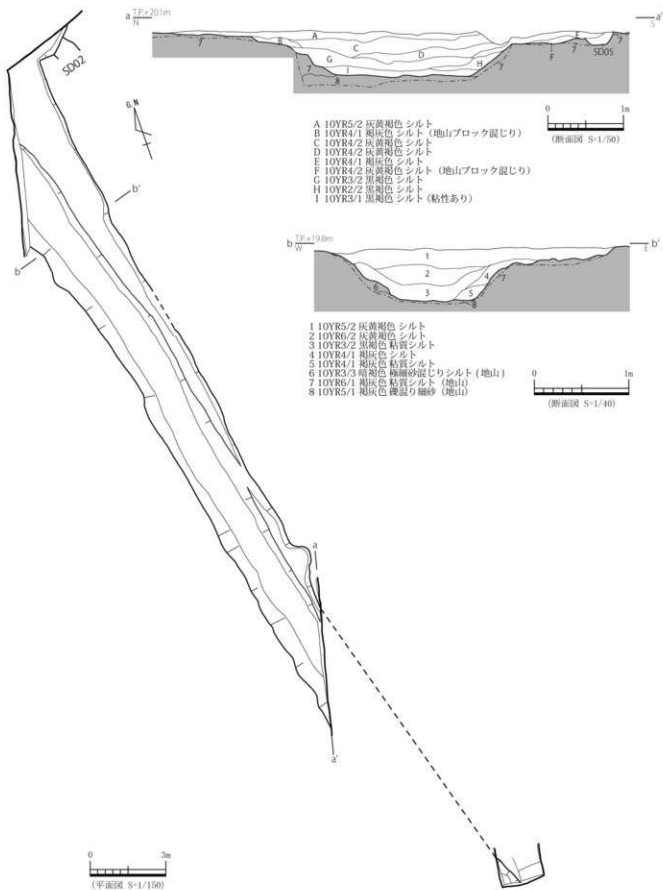
39・40は土師質土器の杯である。39は底部を回転ヘラ切りとする。底部と体部の境は丸みを帯びる。佐藤編年の杯DⅡ-2型式(12世紀後半)に比定される。40は体部がやや内湾している。全体的に摩滅しており、調整方法は不明である。41は土師質土器の皿。内外面ともに摩滅しているが、回転ナデによる調整の痕跡がみられる。底部調整はヘラ切りである。口径及び形態から古代(9～10世紀)に属する。42は土師質土器の小皿。口径及び形態より佐藤編年のBⅢ-2または3型式(11世紀第4四半期～13世紀第4四半期)に比定される。

43～49は土師質土器の土鍋である。口縁部～体部まで残存するものと口縁部のみ残存するものがある。43・44は端面に凸面を形成するが、45～49は端面に凹面を形成している。全て佐藤編年のAⅡ-2類(14世紀中葉～後葉)に比定される。

50・51は移動式竈である。ともに焚口もしくは掛口である。ハケメや指オサエなどの調整が明瞭に残る。52はサヌカイト製の平基式の大形石鏝である。

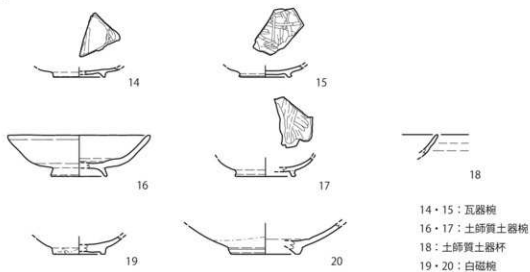
下層からは53が出土した。須恵器壺の底部である。内外面ともにナデ調整を施す。

54～58は試掘調査の際に出土した遺物である。なお、試掘調査においては、SD03をある程度の深さまで重機で掘削したのちに人力で掘削したため、54～58がどの層に属する遺物であるか不明であることを断っておく。54・55は瓦器碗である。ともに高台は接合痕の残る貼付



第10図 SD03 平・断面図 (平: S=1/150、断: S=1/40)

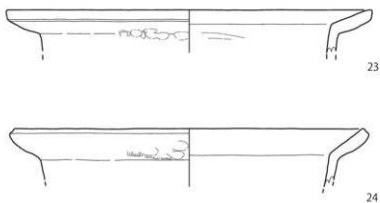
椀・杯



小皿



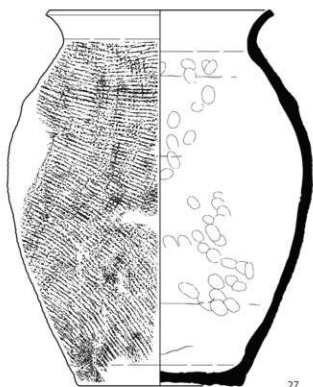
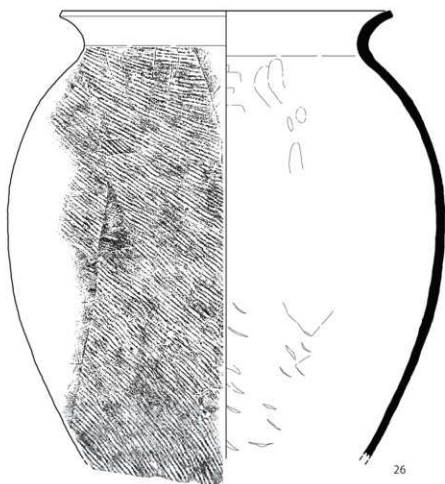
鍋



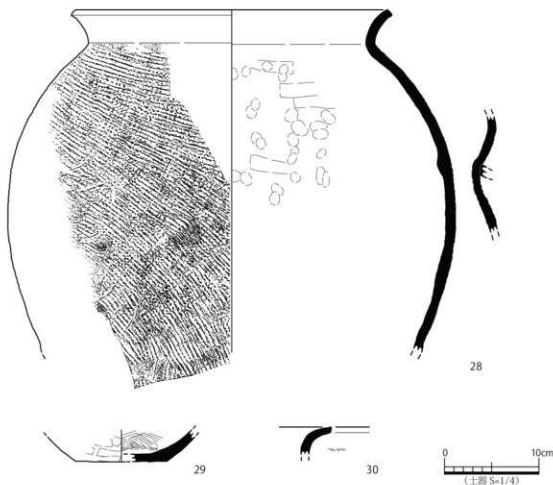
鉢



第11図 SD03 上層出土遺物 (S=1/4)



第 12 図 SD03 中層出土遺物① (S=1/4)



第 13 図 SD03 中層出土遺物② (S=1/4)

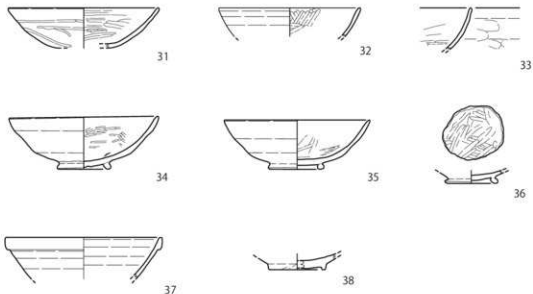
高台で、台形の断面を呈している。54 は残存率は高くないが、口縁部～底部までが残存する。内面をヘラミガキ調整で仕上げる。55 は内面にヘラミガキ調整を施す。口径・器高・高台の形状などから、12 世紀後半～13 世紀初頭の和泉型瓦器碗と考えられる。56・57 は土師質土器鍋。56 は全体的に摩滅しているが、かすかに外面にナデ調整と指オサエが残る。口縁部端面には横ナデによって凹面が形成されている。57 は頸部外面にはハケメが明瞭に残る。口縁部端面には凸面が形成される。56・57 ともに佐藤編年の A II -2 類 (14 世紀中葉～後葉) に比定される。

58 は土師質土器甕。口径は 21 cm 程度に復元され、やや小ぶりの甕である。口縁部端面が丸みを帯びており、その特徴から佐藤編年の E II -2 型式 (12 世紀前半) に比定される。

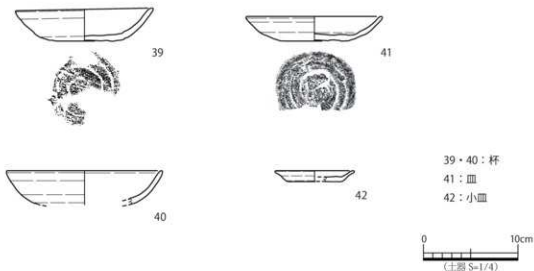
所属時期

全ての層位において出土遺物の時期幅がある。11～12 世紀に比定される遺物が一定量出土していることから、これらの遺物が混入したものとは考えにくい。一方で 14 世紀中～後葉に比定される土師質土器の土鍋が出土量が多いことは特徴的である。以上を踏まえると、SD03 は 11～12 世紀までに開削され、14 世紀後葉に埋没したものと考えられる。

椀



杯・皿・小皿



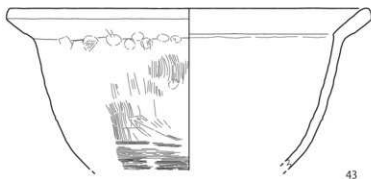
第 14 図 SD03 中層出土遺物③ (S=1/4)

SD 04 (第 18 図)

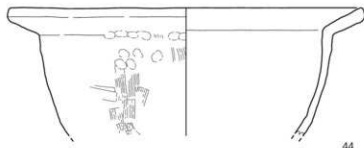
東工区 SD03 の西側で検出した溝で、幅約 0.55 m、深さ約 0.08 m である。断面は台形状で、埋土は、黒褐色シルトの単層である。試掘トレンチ付近で消滅する。遺物は出土しなかった。

SD 05 (第 19 図)

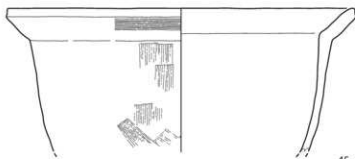
東工区 SD03・SD04 の南側で検出した溝で、幅約 0.3 m、深さ約 0.12 m である。地山層の切り替わりによって不鮮明となるが、西工区でも一部が検出された。断面は半円状で、埋土はにぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの単層である。南東部で SD03 に切られる。遺物は出土しなかった。



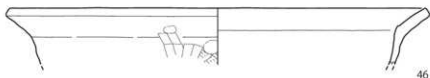
43



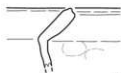
44



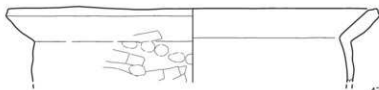
45



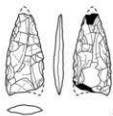
46



49



47



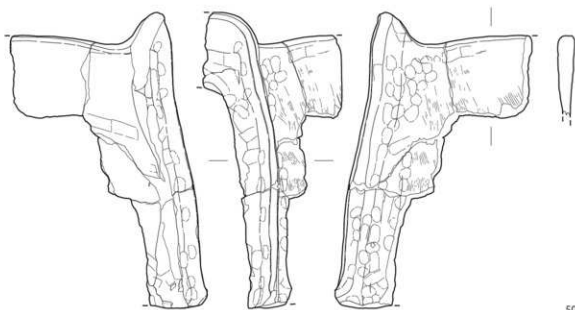
52



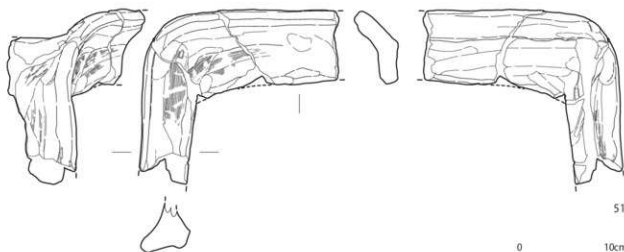
48



第 15 図 SD03 中層出土遺物④ (S=1/4)



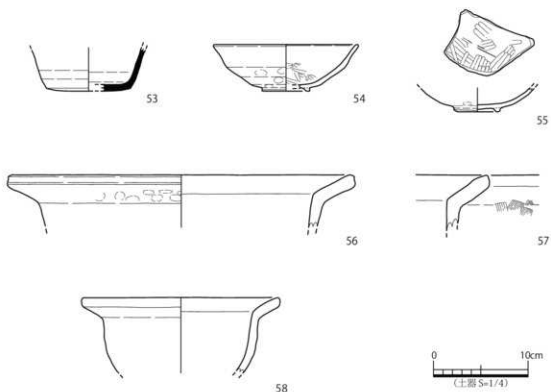
50



51



第 16 図 SD03 中層出土遺物⑤ (S=1/4)



第 17 図 SD03 最下層・試掘出土遺物 (S=1/4)

SD 06 (第 20 図)

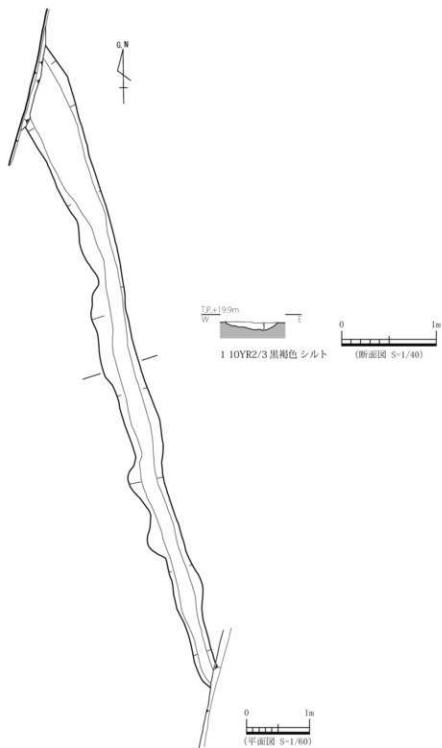
西工区の東側で検出した溝で、幅約 1.8 m、深さ約 0.1 m である。西工区東半中央部の攪乱及び東西工区を分割する畦畔によって切られており、全容は不明であるが、東工区で検出された SD03 に接続する可能性がある。底面は起伏がみられる。埋土は黒褐色シルトの単層である。遺物は出土しなかった。

SD 07 (第 22 図)

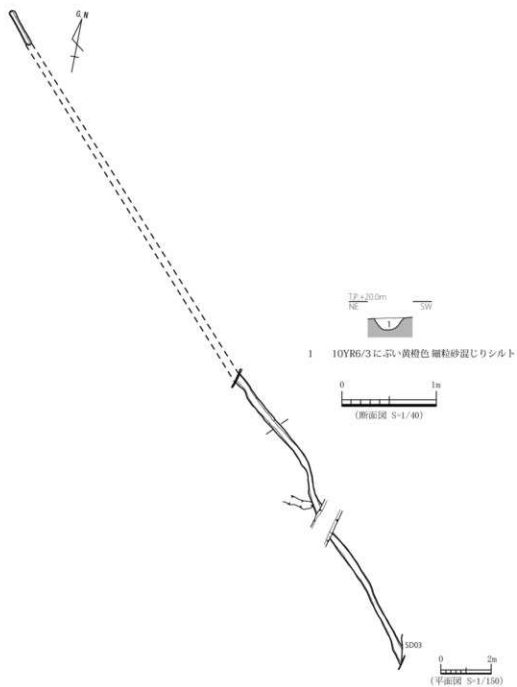
西工区を横断するように検出した北東—南西方向の溝で、幅約 0.7 m、深さ約 0.18 m である。西工区中央付近で攪乱に切られる。底面の高さは東側が低いので、西から東に向かって流下していたと考えられる。流下方向を考慮すると SD03 に接続していたと考えられ、排水溝として機能していた可能性がある。断面は半円状で、埋土は黒褐色シルトの単層である。遺物は土師質土器の小片 1 点が出土した。

SD 08 (第 21 図)

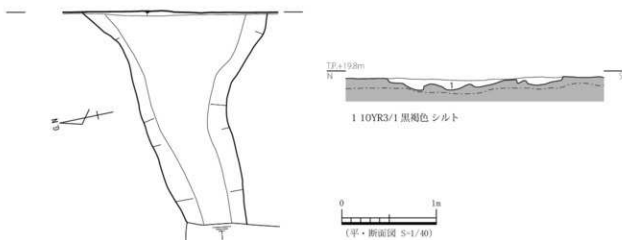
西工区西側中央部で検出した溝で、幅約 0.38 m、深さ約 0.1 m である。調査区外にのびるため、全容は不明である。断面は台形状で、埋土は褐灰色シルトの礫混じりである。遺物は出土しなかった。



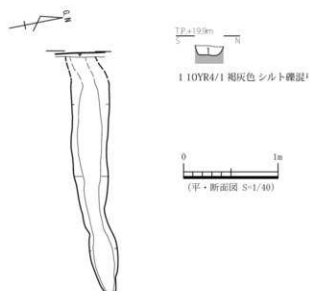
第 18 図 SD04 平・断面図 (平 : S=1/60、断 : S=1/40)



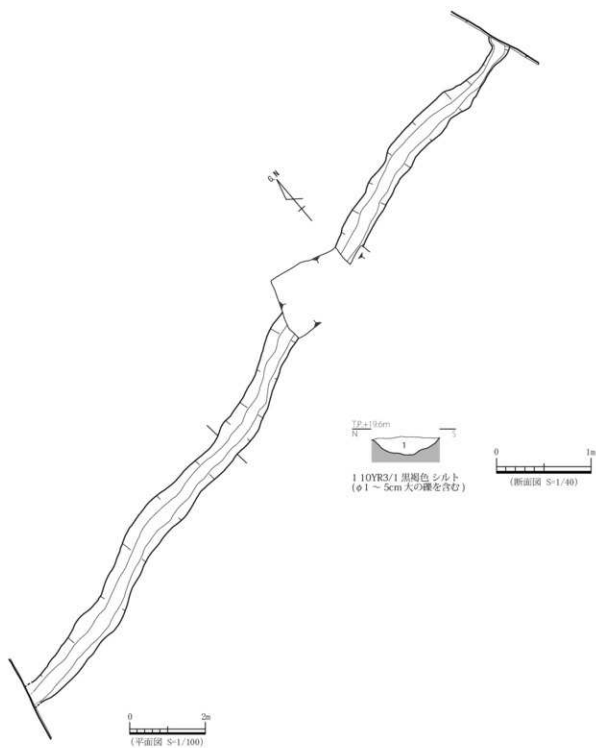
第 19 図 SD05 平・断面図 (平 : S=1/150、断 : S=1/40)



第 20 図 SD06 平・断面図 (S=1/40)



第 21 図 SD08 平・断面図 (S=1/40)



第 22 図 SD07 平・断面図 (平 : S=1/100、断 : S=1/40)

(3) 時期不明

SK 01 (第 23 図)

東工区南東部で検出した土坑で、隅丸の長方形の平面であるが、一部調査区外にかかるため、全体規模は不明である。先述の通り、SD02 との切り合い関係から SD02 より後に形成された遺構である。埋土は上層（にぶい黄褐色シルト、第 23 図 1 層）・中層（褐灰色シルト、第 23 図 2 層）・下層（褐灰色極細砂混じりシルト、第 23 図 3 層）に分けることができる。遺物は上層から須恵器小片・土師質土器片、中層から青磁とみられる小片、下層から土師質土器小片が出土しているが、すべて小片や摩滅の激しいものであり、所属時期は不明である。

SK 02 ～ 04 (第 23 図)

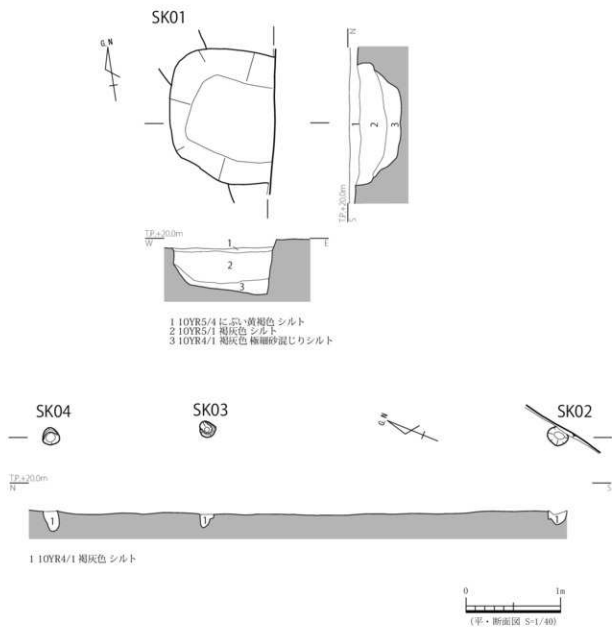
東工区北東部で検出した土坑群で、SD01 と SD02 の間にそれぞれの溝に平行して一列に並ぶ。SK02 は東西 0.18 m 以上、南北 0.24 m、SK03 は東西 0.16 m、南北 0.18 m、SK04 は東西・南北ともに 0.2 m を測る。埋土は全て褐灰色シルトの単層である。一列に並ぶことから、柵列の可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

《参考文献》

香川県教育委員会編 1980『西村遺跡』香川県教育委員会

香川県埋蔵文化財センター編 2019『讃岐国府跡 2』香川県教育委員会

財団法人香川県埋蔵文化財センター編 2002『西打遺跡Ⅱ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター



第 23 図 SK01 ～ 04 平・断面図 (S=1/40)

第四章 まとめ

今回の発掘調査では、古代～中世の遺物・遺構を検出した。以下、調査成果を整理する。

(1) 古代

SD02 から 8 世紀頃に属すると考えられる須恵器と SD03 中層から 9 ～ 10 世紀に属すると考えられる皿が出土した。他の出土遺物としては 11 ～ 14 世紀の遺物が多量に出土していることから、古代に属する遺物は混入品と考えられる。

(2) 中世

大型の溝である SD03 からは 11 ～ 14 世紀に比定される遺物が多く出土したことから、11 ～ 12 世紀までに開削され、14 世紀後葉に埋没したものと考えられる。また SD01 も同様に 14 世紀中～後葉に埋没したものと考えられる。SD01・03 は規模の大きい平行に延びる溝であるため、条里型地割との関係について検討する。讃岐国における条里型地割は金田章裕氏によって分布図が作製されている。氏によると、香東川・本津川沿いでは、微地形条件及び氾濫の影響で分布がみられない（金田 1988・1999）。ただし、高松平野では条里型地割は約 10 度東へ傾いて施工されており、本遺跡の SD01・03 は約 19 度西へ傾いていることから、条里型地割とは一致しないことが指摘できる。

SD01・03 とともに底面から湧水があり、最下層が黒色粘質シルト層であることから一定量の流水があったことが想定される。SD02・04 ～ 07 が SD03 に接続する可能性があること、本遺跡の北側には本津川が西から東へ流下していることなどから、SD03 は本津川へ流れ込む基幹水路として機能していたと考えられる。SD01 も SD03 と同規模の溝であることから、同様の性格を有していたと考えられる。SD03 からは本書で掲載した遺物のほかにもかなり多くの遺物が出土している。そのため、周辺に集落が展開していた可能性が想定できる。供膳具及び調理具が一定量出土していることも集落の展開を示唆するものと考えられる。

また、本遺跡が所在する御厩町には塚（御厩 1 ～ 5 号塚、御厩南部 1 ～ 10 号塚）が点在している。中でも本遺跡の南西約 100 m に位置する御厩南部 1 号塚は発掘調査の結果、中世に造営された長方形の塚であることが指摘されている（高上・中西 2025）。これも周辺に集落が展開していたことの傍証となろう。

【参考文献】

- 金田章裕 1988 「条里と村落生活」『香川県史第 1 巻 通史編 原始・古代』香川県
金田章裕 1999 「高松平野における条里地割の形成」山本英之編『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』高松市埋蔵文化財調査報告書第 37 集、高松市教育委員会
高上拓・中西克也 2025 「御厩南部 1 号塚」高松市教育委員会編『高松市内遺跡調査』高松市埋蔵文化財調査報告書第 255 集、高松市教育委員会

第3表 十器觀察表②

[illegible]

第4表 石器觀察表

国産植物 番号	産地	樹種	材種	直径 (cm)				備考	
				最大径	最大径	最大径	重量 (g)		
15	山形中郷	石櫟	石櫟	ササキイロ	11.5	2.0	0.5	4.0	平置き

写真図版



SD03 出土供膳具



東工区完掘状況（南から）



西工区完掘状況（西から）



SD01 断面



SD01 完掘状況



SD02 断面



SD02 完掘状況



SD03 断面



SD03 遺物出土状況



SD04 断面



SD04 完掘状況



SD05 断面



SD05 完掘状況



SD06 断面



SD06 完掘状況



SD07 断面



SD07 完掘状況



SD08 断面



SD08 完掘状況



SK01 完掘状況



SK01 断面（南側から）



SK01 断面（西側から）



SK02 ~ 04 完掘状況



SD03 出土須恵器



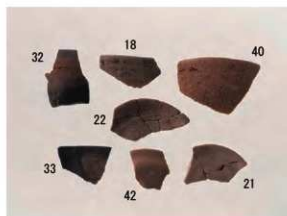
SD03 出土土師質土器鍋・壺



SD03 出土移動式竈



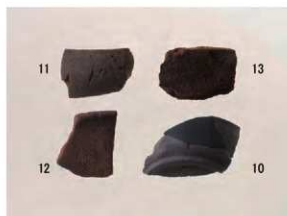
SD03 出土瓦器碗・黒色土器碗



SD03 出土土師質土器（供膳具）



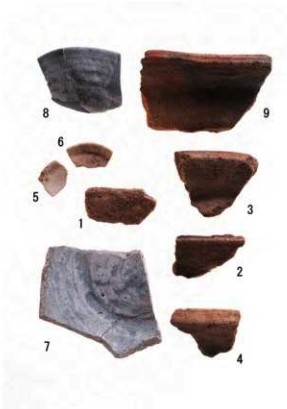
SD03 出土土師質土器鍋・石器



SD02 出土遺物



SD03 出土須恵器・白磁碗



SD01 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	しょうかついせき							
書名	正勝遺跡							
副書名	御版町工場建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第261集							
編著者名	宮田 匡							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦 2025年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	発掘期間	発掘 面積	発掘 原因
		市町村	遺跡番号					
しょうかついせき 正勝遺跡	かひはけん 香川県 たかまつし 高松市 みまやちよう 御版町	37201	11024	34° 18' 26"	133° 59' 14"	2024. 5. 7 ～ 2024. 6. 28	718 ㎡	工場建築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
正勝遺跡	集 落 跡	古代		-		須恵器 土師質土器		
		中世		溝		土師質土器 須恵器 瓦質土器 白磁		
要 約	中世の溝7条を確認し、大型の溝2条（SD01・03）は基幹水路として機能していたと考えられる。SD03からは11～14世紀に比定される遺物が多く出土したことから、11～12世紀までに開削され、14世紀後葉に埋没したものと考えられる。またSD01も同様に14世紀中～後葉に埋没したものと考えられる。他の溝（SD02・04～07）はSD03に接続する可能性がある。							

高松市埋蔵文化財調査報告第261集
御版町工場建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

正勝遺跡

令和7年6月30日

編 集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発 行 富士船舶装備株式会社
高松市教育委員会
印 刷 (有) 中央ファイリング